
猫さんといっしょ

田中 2 3 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫さんといっしょ

【Nコード】

N0861Z

【作者名】

田中23号

【あらすじ】

小さな村の青年が、ちょっと大きめの猫っぽいなにかを拾ったことからいろいろなことに巻き込まれつつ、マイペースに歩いていく物語。

第一話「猫さんを拾った日」

突然ですが、大ピンチです。

なぜか目の前に見るからに肉食っぽい大きい猫がいます。

ちよつと森に入って薬草を摘んでいたただけなのに・・・

こんな森の入り口にいていいレベルじゃないだろ！！

もつと森の奥に群れで棲んでるような感じでしょ君！！

・・・あ！

群れからはぐれたからこんなところに一匹でいるのか

なつとくとなつとく・・・してる場合じゃないし！！

やばいやばい、まだ人生15年しか生きてないしまだ彼女もいた試しがないし最近やつと薬師の師匠で昔はお城勤めしていたすご腕薬師の婆様に「お前に教える事もなくなってきたねえ、うれしいけどちよつとさびしいねえ」とか言われてほろつときたり幼馴染のかわいいあいつが実は男だったっていうショックから立ち直りきれないし川遊びのときとかぜんぜん来ないで家でお勉強してるもんだから僕が12のころまで女だと思ってたんだよ小さいときにした結婚の約束とかどうするんだよちくしょおおおおおの純情をかえせええええ勝手に学術国家の魔法学院なんかに行きやがって「僕のこと忘れないでね」とか涙目で上目遣いで手握られて舞い上が

つたちよつと後に「ユウリ君はすごいわねえ、学術国家の学校に
つちやうなんて。さすがクエスとサラの息子よね」って村のおばち
やんに言われて「え？息子？」「そうよ？サラに似て綺麗だけど。
小さいころは一緒に川遊びしたことあるでしょ？」「え、あ、うん、
え・・・？本当に、息子？つてか男？」「なーに。やだ、今まで女
の子だと思つてたの？確かに綺麗だけど お・と・こ・の・子・よ
と笑いながら言われてハートブレイクしたあのときから3年も会っ
てないのになんかまだもやもやしてるしあれけどそれって俺もしか
してまだあいつのこと・・・うほっ・・・？あああああああ
あ違う違うううううやっぱ今の無し俺は正常おれはせいじよ・・・
ああけどあいつかわいいよな、なんであれで男なんだ・・・あんな
にかわいいに・・・あれなんでこんなことを考えて・・・

ハッ！！でか猫！！

つて、あれ。

あの猫威嚇してるけど動いて無いし、弱ってる？

怖いけどなんかほつとけないし、少し近寄ってみるか。

「怖くないよー、怖くないよー」

言ってると思うけど犯罪チックな台詞だなこれ・・・

近寄っても飛び掛ってこないな。

って、うわ、なんじゃこりゃ、はひどい怪我だな。

うーん、手持ちじゃまともな処置ができません。

応急手当だけして、村の婆様に見せるしかないな。ちなみに、婆様とは僕の師匠で、凄腕の薬師だ。

とりあえずさつき摘んだ薬草と、布と水は確かバツクにあったな。

「猫さんや。応急手当だけしちゃうから、ちょっと染みるけどできれば食べないでほしいな、なんて」

「ぐるるる……」

お？猫が威嚇の体制を解いたな。

言葉通じるほど高位の魔物かこの猫さん。

とりあえず大丈夫そうだし傷口を水で洗って薬草をちよっと揉んで布と一緒に巻きつけよう。

これでよしっ！

応急手当もしたし、あとはお持ち帰りするだけか、このくらいのサイズなら何とか抱えられるはず。

「猫さん、猫さん。とりあえず応急手当したけど傷が深いのでできれば村に連れ帰ってちゃんとした処置をしたいんだけども。抱えてよろしいか？」

「へー」

つと、一鳴き。

おーけーってことかな。

よし、おつもちつかえっりいいい！

なんとか抱えられるな。

けど残りの薬草は放置だなこりゃ。

村まで急ぎますかっ！

第二話「天使様をお願いされた日」

帰って着ました、おらが村。

その名も「サイ村」

でかい猫を抱えて猛ダツシュしてるのを見てみんな声をかけてくるが返事をする暇はない。

急いで村の端にある我が家の納屋に藁を敷き詰め、猫さんを横たえて婆様のいる母屋に駆け足！

この時間なら部屋で薬草をぐりぐりしてるか、ことごとしてるな。

「婆様！でかい猫が森で怪我していたので連れ帰ってきました！傷が深いので急ぎで診てもらっていいですか！」

「分かったわ、納屋かしら？」

「はい、寝かせてあります！」

婆様は一瞬だけ驚いた顔をするもすぐに立ち上がり、手当箱を持って急いで納屋に向かい、猫さんを通り診てもらっ。

「応急手当がよかったわね、新しい布と四番と十一番をお願い」

「わっかりました！布と四と十一ですね！」

また母屋まで走って診察室の棚から布と四と十一と書かれた引き出しの中の小瓶を持って引き返す。

あとは婆様の独壇場。

テキパキと治療するので、布を巻きなおすくらいしか仕事が無かったぜ・・・

「猫さんは何を食うかねえ？肉？とりあえず果物をもっていくか」

治療が終わり、猫さんが食べれそうなものを見繕って納屋に戻るも、猫さんご就寝中。

猫さんは、婆様も見た事も聞いた事も無い魔物？だそうで。

どうしたものかと二人で考えるも、とりあえず元気になるまで面倒を見ようということになった。

「あとは僕が納屋に残って猫さんを見とくので、婆様は母屋で寝てください」

いつの間にか夜も更けてきたので婆様を母屋に返し、毛布に包ま
て猫さんの様子を観察する。

治療してから全然起きないので、起きたときに何か食べ物を与えな
いといけないし。

しかし、さすがに今日はいろいろあつたし、眠・・・い・・・。

「人の子よ。我が主の獣を助けてくれたこと、礼を言います」

めのまえ に しろい なにか が あらわれた ！

夢か夢だよな。

なんか神々しいけど。さすが僕の夢だな。うん。

「夢ではないですよ」

「あ、はい」

えっと・・・どちら様でしょうか・・・？と言える雰囲気じゃな
いな！

「人の子は私達のことを天使と言います」

ああ、心も読めるんですね・・・

「はい」

つて、天使様ですか、僕なんかしましたっけ、いや確かにあんまり
信神深くないけども。

ちゃんとエツカ教の巡教シスターさんが来たときとか広場でお説教
聴いてお祈り奉げてますよ！

「先ほど言った通りです。我が主の獣を助けたでしょう。その礼を
言いに来ました」

・・・あ！

もしかして猫さんのことですか！

「はい。あれは我が主が作りだした獣の末裔です」

へえ

つて天使様の主は神様の理論からいくと、猫さんつてもしかして神獣……!?

「そうなります」

超VIPじゃないですか猫さん……

そしてレアだ……

なんでそんなすごい獣がこんな田舎の森にいるんだ!

しかも怪我してるし!

「元はアルバ大陸の霊峰サドンにいたのですが。生まれた直後に魔物が攫ったのです。怪我はそのときのものですね。すぐに親の神獣が追ったのですが、追い詰められた魔物が苦し紛れに転送魔法でとばしたのです。」

なるほど。しかし神様が天使様がぱぱつと助ければ良かったんじゃない?

「天界に住まうものは、己の意思で世界に力行使することは、ほぼできません。世界に請われた時のみ行使できます」

なるへそ。大変ですね。

「なので人の子よ。我が主の獣をサドンまで送り届けてはくれませんか。親の神獣も己の領域を長く空けることはできません」

アルバ大陸ですか。送ってあげたいのはやまやまですが、ちょっと遠い上に僕は低位の魔物にもおくれをとりますよたぶん、そんなのが高位の魔物なんてとてもとても。

「もちろん、それなりのチカラを貸し与えます」

あれ、でも干渉はできないんじゃない？

「力の直接の行使はできませんが、我が主と私の祝福が与えられます」

神様と天使様の祝福・・・？、具体的にはどのような？

「我が主は癒しを、私は守護を司っていますので、人の子が祝福を受ければそのチカラを得ることができます」

おお、癒しに守護かー。それならなんとか・・・なるのか？

「神獣はまだ幼いですが別の神の祝福を受けております。癒しと守護の祝福があれば魔物程度退けられるでしょう。送り届ける期限については、人の子、そなたが生きている間であればいいです」

むむ、気の長い話ですね。分かりました。それではこの件お引き受けいたします。

「おお、礼を言います、人の子よ。祝福はそなたが起きたときにはすでに成されているでしょう。それでは、頼みましたよ」

あいさー、がんばりますよ！

第三話「猫さんの傷と婆様の腰が治った日」

・・・!

なんか生暖かいものが顔に。

「にゃー」

にゃー？

ハッ！猫さん顔を舐め回さないで！

ほら、果物ならあるから！

はいはい、とったりしませんのでゆっくり食べてね。

にしても、猫っばいとは思ってたけど、本当に「にゃー」と鳴くとは。

さてはて怪我の具合はどうかなー？

むむ、急に治るわけないか。

そういえば奇妙な夢だったな。しかもいやにはつきり内容覚えてるし。

癒しのチカラがあれば猫さんもすぐ治せるんだけどね。

夢の中でもらってもな。

・・・

試してみるか。

しかし、祝福をもらったとしてもどうやって使うんだ？

とりあえず祈ってみるか！

(猫さんの怪我がなおりますように！！ついでに婆様の腰痛も治りますように！！)

これで治ったら神様信じるわ、僕。

とりあえず1分ほど祈ってみました、どうかな！

ちょっと包帯取りますよーっと。

「じゃあ」

はい、いい子ですねー。

っつて、おおお・・・おおおおおおお！！！！

な、治ってやがるっつっつっつっつっつ!

なんだこれ、綺麗さっぱりじゃないか!

すごっ、神様すごっ!天使様もすごっ!

夢だけど夢じゃなかったのかあれ!

「あれ、ということとは、僕はお隣の大陸までお使いに行かないといけないってことなのか・・・?」

「にゃあ〜」

「ああ、うん、猫さんもお家に帰りたいもんね。」

「にゃん!」

おお、言ってることは完璧に理解してるみたいだなあ、さすが神獣。

これは腹を決めて、行くしかないか。

「となれば、婆様に報告しないとか。あと腰痛治ったか聞かないとな」

「しゅーん」

「こら、猫さん！さすがにその巨体でのしかかられるとやばい
！」

「じゃあ〜」

「甘えた声だしてもだめです！とりあえず母屋に行ってくるから、
おとなしくしてるんだよ！」

「じゃう」

と言っわけで母屋へ移動。

納屋に行こうとした婆様と、ちょうど廊下でかちあったので話が
あると言って居間へ。

さくつと夢の天使様の話をして、実際猫さんの傷が治った話をした
ら、

「ちょっと猫さんの様子、見てくるわ」

と言って婆様は納屋に行っってしまった。

朝食の準備をしつつ待っていると、すぐに戻ってきたのでパンとサ

ラダを持って居間へ。

「本当に治ってたわ」

「婆様に言われてやっと確信が持てた気がします」

寝ぼけてただけとかいう落ちじゃなくてよかった・・・

とりあえずいい加減お腹も減ったので、

「ちょっと話も長くなりそうですし、ご飯を先にいただきますよ」

と婆様にいいつつ、さっき火にかけた昨日の残りのスープを配膳。

さすが婆様特製スープ、いい匂いだ。

この味は、なかなか習得できないんだよなあ。

「日々の神の慈悲と恵みに感謝します」

「同じく、感謝します」

婆様の口上にすばやく賛同して、いただきます。

お腹がすいてたこともあり、すぐに目の前の食事が無くなった。

しかし、神様か。

これは、日々の感謝が欠かせないな。

あれけどお願い事されてるし、感謝されるのは僕じゃないか？

なんて熱心なエツカ教徒の前で言ったら

「神が試練を与えてくださったのです。感謝するのが当たり前ですよ」

って言われるな。

まあ、僕も婆様もあんまり熱心な教徒じゃないからなあ。

けど、神様と天使様の祝福を頂いたわけだしな、信仰心は心の片隅にでも持っておこう。

あ、祝福といえば。

「婆様、腰の具合はいかかでしょうか」

「そいえば、今日はすごぶる調子がいいわね、あなたが癒してくれたのかしら？」

「ええ、朝に猫さんの傷と一緒に治るように祈ってみたんですが。」

まさか本当に治るとは・・・

これは片隅じゃダメかもなあ。

第四話「行ってきますと言った日」

さて、腹ごしらえと確認も終わったことだし。

「婆様、僕はどうやら本当にお隣の大陸までお使いに行く事になったようです」

「そのようねえ。薬師としては一人前と呼べる知識は持たせたわ。けど、長旅となると、また別にいろいろと必要な技術があるものよ。なにより魔物に対処しないとイケないし」

「魔物に関しては、猫さんが強いらしいので。後は僕も怪我はすぐに治せますし、守護の祝福というのも頂いてますので、そこまで心配いらないと思います」

「分かったわ。あなたの事だから無茶なこととはしないと申し、古い先短い婆を悲しませることもしないでしょう？神様もついていることですしね」

「そうですね。古い先短いという部分以外は否定しません。神様もついていますし」

二人揃って少し笑って、

「村のこと心配しなくていいわ。腰痛を治してもらいましたから、薬草取りもいけるわ。」

「けど無理はしないでくださいね。」

「まだまだ現役よ?」

「老い先短いつて言ってませんでしたっけ?」

「生涯現役ですから」

「かないませんね」

「うふふ」

本当に、この婆様に敵わないな。

家のほうは大丈夫そうだし、長旅の準備をしないと。

「長旅の知識やらは、ユウリのお父さんのクエスに聞くといいわ。
あの人は昔、冒険者として有名だったから」

「あ、うん、はい、分かりました」

ユウリというのは僕の幼馴染だ。

とてもかわいらしい外見の幼馴染だ!!

だが男だ!!

男なんだよおおおお！！

微妙な受け答えになったのはそこらへんが起因してるんだ。

初恋は実らないものだよね・・・

ちなみにユウリは今、学術国家の学校にいるため、3年ほど村を留守にしている。

そのお父さんのクエスさんは、とても気さくでいい人だ。

昔はぶいぶいいわせていたらしいけど、奥さんのサラさんと駆け落ち同然でこの村に来てからは、剣を鍬に持ち替えて、頼れる人として村の相談役にもなっている。

そして奥さんには尻に敷かれている。

奥さんのサラさんは、貴族のお嬢様だった、なんて話もあるくらい、上品で柔和な人だ。

怒るととても怖いけど。

めったに怒ったところを見た事はないが、クエスさんがお酒飲みすぎたぶつ倒れたときは、やばかった。

いつもの笑顔なんだが、目が笑ってない上に、ただ淡々とクエスさんを数時間に渡りお説教していた。

僕ならあのプレッシャーに30分持たない自信がある。

サラさんの話はおいておいて、こういった話ではクエスさんが一番頼れる人に違いないので、教えを請いに行く事にしよう。

クエスさんの家に行き、ノックもせず突撃。

「クエスさん、サラさん、こんにちは。」

「おう、キャス坊。どうした？」

「いらっしやい、キャスくん」

こんな小さい村にプライバシーなんてものもあまり無く、大抵用事のある人の家には突撃して、いなければ探すか、そのまま待つかだ。村全体が大きい家族って感じた。

ちなみに「キャス」というのは僕の名前だ。

すっかり自己紹介も遅れたが、ひとつよろしくたのむよ！

「見聞を広げるために、少し遠くまで旅に出ようと思ってるんです。そこでクエスさんに相談にきました。何分村からあまり出たこともないので」

サラさんがすすめてくれた椅子に腰掛けつつ答える。

ちなみに、この見聞を広げるため、というのは、婆様と考えた旅の口実だ。

さすがに、神様のお使いとか神獣とか言っても、トラブルの素にかなりそうにないしね。

教会の人に聞かれて、下手に騒がれたら面倒だし。

「ふむ、どのくらいの旅を予定してるんだ？」

「隣のアルバ大陸まで足を伸ばそうかと思っています」

「アルバまでって、そりゃあまた随分と長旅になりそうだなおい」

「あっちのほうまで行かないと、採れない薬草なんかもありますからね」

「しかし、あっちはいまだに戦争やってるらしいぞ」

戦争か。なるべく避けて通りたいたいんだけどなあ。

少し考え込んでると

「キヤス坊も、男の子だしな！いいぜ、長旅にいるもんとか、覚えておくといいこととか、まとめて教えてやる！」

と、クエスさんが言ってくれた。

それから数日、クエスさんの家に通いながら旅に必要なものを揃え、知識を見につけ、猫さんの世話をした。

猫さんもすっかり歩けるようになり、僕の後ろをくつついてくるものだから、村ではちょっとした人気者になっていた。

最初こそ、大きい猫っぽいなにかなんて、魔物かと疑う人もいたが、「にゃーにゃー」鳴きながら人の後ろを歩く姿は愛らしく、子供を中心に触らせてほしいと散々言われた。

そんな感じで、出発の日まで猫さんに後ろから追われつつ過ごした。

そして出発の前日、ささやかながら村のみんなが宴をひらいてくれ、飲んだり食ったりと大いに騒いだ。

その翌日、出発の日には村人総出で、お見送りしてもらった。

「あまり急がないように。自分の歩幅で歩いて行けばいいのよ。あなたに神のご加護がありますように、ってね。うふふ」

「男の子だからな、冒険したい年頃ってのもあると思うが、無理はするなよ！」

「ユウリのところに行ったら、顔見せてあげて頂戴ね。あの子喜ぶわ」

「水には気をつけるんだぞ！」

「何かあったら無理せず戻って来るんだよ！」

「猫さんばいばい」

やさしい言葉をかけられると嬉しいやら恥ずかしいやら。

まあ、とりあえず！

「いってきますー！ー！」

「にゃーんー！」

第五話「纏めてみた日」

さて、街道を歩くこと数時間。

休憩がてらこの数日で学んだ事を少し整理してみよう。

まずは地理から。

といっても、僕自身そこまで詳しくは知らないので大雑把なものだけ。

まず、現在地はオーステス大陸の南に位置するイルア王国、そのまた南に位置するサイ村を北上する街道だ。

この街道をまっすぐ行くと、イルア王国南方最大の町ハロースに着く。

さらに北上すると王都シザルス、その北が北方最大の町ヒルースだ。

イルア王国の北はウルテマ學術国だ。

その名の通り、ありとあらゆる学問が集まっている。

幼馴染のユウリもここにいる。

ウルテマの北はエツカ教の広大な教皇領となっていて、巡礼地として有名だ。

ちなみにエツカ教は、数多くの神々を信仰する、多神教だそうだし。まじめに説教を聞いてなかったので詳しくないし、あまり興味もない。

ちなみに他の宗教というのは聞いた事が無い。

さて、教皇領のさらに北へ行くと、カリウス帝国とセラリア同盟国がある。

この2国は長い間戦争中である。

もつとも、最近の大きい戦は3年前で、双方疲弊しきって事実上の休戦状態らしい。

カリウス帝国から東の海上を抜ければ目的地アルバ大陸である。

アルバ大陸のほうも、戦争をやっているらしいのだが、詳しい情報が入ってくるはずもないので、道すがら集めることになる。

とまあ、これが大雑把な地理の話で、目的地までのルートは簡単。

ひたすら北上してカリウス帝国でアルバ大陸行きの船に乗るだけだ。時間は掛かるだろうが、ルートはほぼ一直線なので迷うことはないだろう。

アルバ大陸に入ったら、目に付く中で一番でかい山が霊峰サドンらしい。

それぐらい大きい山だそうだから、現地で聞き込みすれば大丈夫だろう。

行商人のおっちゃんの話や婆様の持ってた昔の古い地図を頼りにしているので、どこまで正確かわからないけど！

次に、種族については、婆様が昔王都のお城勤めだったこともあり詳しい話がきけた。

イルア王国は種族に頓着しない気風なので、王都あたりには他種族も訪れるようだ。

僕が人族意外で見た事があるのは、亜人族だが、彼らは多種多様な種族だ。

耳、尻尾、足、手、顔、体の中心から遠い箇所ほど動物の特徴がでるらしく、それにも個体差があり、尻尾と耳を隠せば人族にしか見えない者もいれば、顔全体が獣という者もいる。

セラリア同盟国は亜人の作った国で大半の国民が亜人だ。なので戦争してるカリウス帝国には亜人がほとんどいない。

あとは魔族もいるが、僕は見た事が無いうえに、人族とあまり変わらないため、見分けるのが難しい。

魔力が高く、体に魔力による線が紋様のように浮かび上がることがあるのでそれで見分ける。

魔力が出たついでに魔法の話をしたのだが、サラさんいわく僕は魔力を認識することが上手じゃないらしく、魔法を使うことはできないそうだ。

昔に、幼馴染のかわいいあいつが魔法の勉強をしだしたときに、自分も習おうとしたときに聞いた。そして泣いた。

そしてあきらめきれずに、ちよくちよく幼馴染の家に顔だして一緒に勉強したときの知識を引っ張りだすと！

生物は多かれ少なかれ魔力を持っていること。また世界にも魔力が漂っていること。

魔力を認識し、自分の意思で扱うことができる者を魔法使いと呼ぶること。

自分の魔力を消費しても、少しずつ世界から自分の体に取り入れて回復すること。

火、水、土、風の属性があってそれぞれ火と水、土と風が対になっていること。

魔力は一定の言葉や文字列、形、鉱石などに宿ること。

その特製を生かして、魔法具と呼ばれる魔力を供給するだけである一定の効果を得るものを作り出していること。

魔力は人によって一部に違いがあり、それによって個人を特定することに使われていること。

いまだに盛んに研究されていたり、古代の遺跡から今の時代では再現できない魔法具まで発見されるらしく、謎の多い分野であること。

こんな感じだったはず！

自分で自分の傷に塩を塗ってる気分だ！

結局、魔法は使えず、面白くなくなってだんだん幼馴染の家になくなって・・・

今夜は猫さんに慰めてもらおう・・・抱き枕的な意味で。

気を取り直して、魔法とは違うけど教会の信者の中でも信仰心の高い者や神に氣に入られている者は、祈りを奉げることによって、奇跡を起こすことができる。

しかし、長時間祈らないといけないこと、それでも思った通りの効果がでるか分からないことなど不安定な要素もある。

それを差し引いても、絶大な効果を引き起こすから、教会は大陸中に信者がいるのだろうけど。

ちなみに僕の祝福もこの奇跡の類なんだろうけど、たぶん教会のよりの手軽に起こすことができるんだろう。

言語と文字については世界でほとんど共通のものが使われているといわれている。

亜人族のなかには、部族独特の言語や文字を使う者たちもいるが極少数だ。

クエスさんが世界中心赴くままに周ってたときに、大体話も通じだし、文字も読めたって言ってたし。

話が通じなかった亜人族の方たちとも、拳で大体通じたって言ってたし。

次いで、ギルドについてはクエスさんがいまだに一応所属してることになってるらしいので、いろいろ聞かせてもらった。

ギルドは大陸全土に渡り点在し、アルバ大陸にもある。

ギルド所属員への、依頼の管理、身分の保証などをやっている。

依頼については、階級制度があつて、自分の階級にあつた依頼しか受けられないことになっている。

身分保証については、ギルドに登録するとき、教会に並ぶ情報網を持つギルドが、各地のギルドの情報を繋ぐ魔法具によって、過去から現在までの犯罪歴等無いか厳しくチェックし、ギルド登録後も逐一情報は更新されるので、信頼度は高いらしい。

あとギルドの大きな仕事といえば、各国の貨幣の両替がある。

オーステス大陸の各国は、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚、ということになっているが、国によって貨幣の形や重さ、純度に至るまで違いがあるため、ギルドが両替所としての役目

も果たしている。

貨幣の目安としては、町の安宿にとまるのに、銅貨20枚、一食たべるのに銅貨5枚といったところ。

ちなみに、クエスさん、階級が高いらしく、紹介状を書いてもらった。B以上の人なら保証人になれるので、面倒くさいチェックが省略されるらしい。ありがたやありがたや。

最後に、魔物についてかな。これもやっぱりクエスさんが詳しくかった。

けど、ドラゴンまで見てきたように語らないでください、勘弁してください。弱点とかいいです、そんなやばそうなところ切りつけるくらいなら、見たら即逃げるんで。

と、いろいろ脱線しつつ聞いた話を纏めると。

魔物は世界各地にいて、ゴブリンみたいな低級のものからドラゴンのような高位のものまで多種多様にいる。

高位のものほど知能が高いらしい。

魔物を倒すと、魔力石という石が浮かび上がる。

これは、魔道具の動力として使われるのでギルドが高値で買い取ってくれる。

もちろん、高位のものであればあるほど値は上がる。

魔物によって武器や防具に加工できる部位があったり、肉が食用として高値で取引されたりする。

ちなみにドラゴンの肉は、腐らず、年月が経つにつれおいしくなっていくらしいのだが、大抵の人は我慢できずに食べてしまいうらしい。

それくらいうまい。うまかった。クエス家の床下は食材の宝石箱やで！ 比喩表現ではなく。ざっくざくだ。

あとは魔物によっては弱点、逆に効かないものがあったりするので、クエスさん聞いたのだが。

あの人、なんで人が超えちゃいけないような魔物の弱点しか知らないんでしょうか。

もう少し低いレベルの魔物の弱点が聞いてみると、殴ったら消えたぞ、って……

もはや武器すら使ってないし！

ここら辺にでる魔物の特徴を村の自警団の人教えてくれて助かった。

とりあえず、こんなところか。

当面の目標は、猫さんと僕の手カラの確認と、ハロースでギルド登録してお金稼いで旅費をつくらないといけない。

「がんばろうな、猫さん！」

「にゃー！」

「けど、ドラゴンとか見かけたらすぐ逃げるんだよ！お肉はおいしかったけど、飛び掛っちゃいけませんからね！」

「にゃあ・・・」

「残念そうにしないの！猫さんの親猫さんなら食べさせてくれるだろうからさ。たぶん、きつと」

「にゃんっ」

「他にもおいしいものいっぱいあるだろうからさ。のんびりいきましょー！」

「にゃー・・・」

第六話「町に着いた日」

翌朝。

猫さんが寝ぼけて噛み付いてきたこと以外、特に問題も無く起床。

ちょっと血が出たもののすぐ傷口が塞がったので、癒しの祝福も自分だけは常時発動してるようだ。

すまなそうにしてる猫さんに、傷がないことを見せて安心させて、手早く準備を整えて出発。

段々と、魔物の出没頻度が高い地帯になって来るらしいので、少し緊張しつつ歩く。

しかし、武器は腰の鉞くらいしかない。

薬草取りに行くときも、鉞一本で魔物を倒していたので、なんとかなると思っけど。

守護の祝福がどんなものか確かめないといけない。

猫さんの戦力も確かめないといけない。

猫さんには朝、どんなことができるのかだけ聞いてみたけど、さすがに細かいことは分からない。

一応、「がおー」ってな感じでお口開けてアピールしてたから、口から何かすごいものをだしてくれと思うんだけど、自信がない。

不用意に、何か攻撃してもらうのもな。

腐っても鯛、小さく？ても神獣だし、底が見えない穴とか地面にあけちゃったらいやだしね！

段々と木々が生い茂ってきたきた道の先に、この旅初遭遇の魔物がいた。

「ゴブリンが3体か」

ゴブリンとは、森に棲み棍棒などを振り回し動物を捕食する、1mちょっとくらいの子鬼だ。

集団で狩をし、ときには人間も襲う。

今回はウサギ狩りだったようだ。

両手にウサギと棍棒を持ち、こちらを威嚇して来ている。

「猫さん、がおーってやつ、いける？」

「にゃんっ」

何がどうなるか分からないため、微妙な聞き方になってしまったが、猫さんは了承の一鳴きをすると、お口を開く。

瞬間・・・

何かが高速で地面をえぐっていき、3匹のゴブリンのうち一匹に着弾、爆発、余波で他2匹も文字通り消える。

「猫・・・さん・・・？」

「にゃ？にゃくん」

なにその「どうしたの？ほら3匹吹っ飛ばしたでしょ、ストライクだよ！ほめてほめて」みたいな顔は！

「猫さん！今の禁止、ダメ！絶対！あんな火力いらないでしょ！？木もあんなになぎ倒して！」

「にゃう・・・」

しょんぼりする猫さんを見てちよっと罪悪感。

「ね、猫さん、ゴブリン倒したのはえらいよ！すごいよ！ただ少し周りの被害を考えてというか、火力を抑え目にしないと、ね？わかるよね？」

「にゃん」

「おお、さすが猫さんだ！えらいぞ！」

と言って、全力で撫で回すと、すっかり猫さんも機嫌が元通り。

ああ、猫さんかわいいな！もう！

その後、何度か遭遇したゴブリンや、コボルトを猫さんの魔法？ブレス？で倒し、加減をマスターしてみた。ついでに魔石も貯まってきた。

ちなみにコボルトとは、二足歩行の犬型魔物で、サイ村周辺ではほとんど見なかったが、器用に弓を使うものもいる。

「よし次は、僕が前が出るから、猫さんは合図があるまで待機で。おーけー？」

「にゃん！」

「いい返事だ、守護の祝福がどんなにか試すから少し間置いて待っててね！」

守護ってことは、たぶん攻撃が効かない、もしくは効きにくい、とかそんな感じだと思っただけど、攻撃当たることに神様に祈るのか・・・？

さすがにそんな不便じゃないよな。

一応神様に「なんで説明がないんだっ！」と祈ってから魔物の前に出る。

コボルトが2匹なので、普通に倒せそうだが、どうするか。

ーカッン・・・ー

と、油断したところに後ろから矢が来たが、何か硬いものに当たったかのような音を響かせ落ちる。

これは、予測どおりの効果かな・・・？

考えつつ、目の前のコボルトを無視して背後の木の陰にいる弓持ちコボルトに接近、いつきに鈍で倒そうとするも、もう一匹草葉に隠れていたコボルトが弓を猫さんに向けていて・・・射

った……!

「猫さんよけて!」

叫んだが遅い、猫さん目掛けて矢が……矢が……?

あれ、なんでこっち来てるのあの矢!

どうみてもいろんなものを無視してこっちきてるよ!?

なにそれ、どんな高等技術!

うお、あたる……!

——カッン……——

ああ、守護の祝福があるか。

よっと!

呆然としていたコボルトの群れを倒して、猫さんの元へ。

その後、何戦かして、なんとなく守護の内容が分かってきた。

硬くなる自体は祈らなくても常時祝福が効いてるみたいだ。

さらに、祈ることによってある一定の距離にいる敵を強制的に全部自分に向かってこさせることができるようだ。

そして味方に向かうはずだった攻撃も、強制的に自分に向くようになってる。

なんとという肉壁仕様・・・

あと、硬いことは硬いんですが、限度があるらしく、それを超えると超えた分だけ僕にダメージがくる。

まだこのレベルなら超えた分もちよつとちくつとするかなあ？程度で大丈夫ですが高位の魔物とかやばいかも。

「あんまり強い攻撃に当たると、自分が怪我して、すぐ治る。そしてまた攻撃されて・・・」

身につけている物にも守護がかかっているで、服には特に傷みも無く、限度を超すと僕の肉体にダメージがくる。

これは防具を買っても意味がない気がしてきた・・・

鍛えれば限度あがるのかなあ。しかし、この場合鍛えるのは肉体じやなくて信仰心なのか・・・!?

それから、猫さんと前衛後衛に別れてコンビプレイ!

少し、いや、かなり、誤射が心配だったけど、猫さん、かなりの腕前?のようで僕が引き付けた魔物をスナイプしていく。

猫さんの咆哮?手加減してるから吐息?は手加減と狙いを定めるのにまだ少し時間かかるから、町でちゃんとした武器を買って自分の攻撃力もあげるかあ。

僕壁猫さん無双で、結局ハロースには2日目の昼過ぎにはついてしまった。

「しかし、猫さん連れてはいれるのかな？」

「にゃーん？」

「いやほら、すれ違う行商の人とかも、ぎよつとして猫さん見るじゃない。門番の人にも魔物と間違われてはいれないんじゃないかと」

「にゃっ、にゃっ、にゃ〜う・・・」

「おおお、お、落ち込むな猫さん！なんか言われたらペットってことにごり押しすればきつと大丈夫だ！！村長さんも紹介状書いてくれたし！！」

「にゃーん、にゃーん」

神獣をペットとか言ったらあとが怖いけど、仕方ない。

「よし、それじゃあ、気を取り直して、いきましょー！！」

「にゃーん・・・」

第七話「町に入った日」

唐突だが、なぜ僕がいまだに猫っぽい何かであるところの神獣を、名前もつけずに猫さんと呼んでるかというと。

ただ単純に、神獣に名前つけるなんて怖くてできなかつただけのことである。

そんなわけで、猫さんにおちついてる。

そしてなぜ、唐突にこんな話をしたかというと。

ハロースを囲む壁が見えてきて、いざ入門、と思ったら手前で止められた。

「止まれ！！」

びっくりして、挙動不審になってしまい。

「止まれと言っているだろう！止まらんと力づくで止めるぞ！こちらには魔法士もいる！」

やばいつ、と思っつてすぐに止まる。

「ぐるぐるっ」

と、隣から唸り声が・・・！？

「ね、猫さんストップ、ストップ！大丈夫だから、おとなしくして
！！」

「ぐるる・・・」

なんとか猫さんにも止まってもらい、門番？さんに尋ねる。

「えーっと、この通り、止まったんですが、どうすればいいでしょ
うか？」

「え、あ、ああ。俺のあとについて来てきれ。くれぐれも変なまね
はするなよ。こちらには魔法士がいるからな。そちらの魔物にも言
い聞かせてくれよ」

「わ、わかりました。猫さん、あの人たちがおーってしちゃだめ
だからね！大人しくついてきてね！」

「じゃん」

「（ ）がおーってなんだよ!!」（ ）」

「えーっと、それじゃあ、キャス君は、サイ村から来たんだね？」

「はい。見聞を広めるために世界を周ってみたいと思ひまして」

「ふむ。村の身分証、クエスさんのギルドへの紹介状、サイ村の村長の紹介状もある。」

身分証とは、年に一度、その地域の役人が特殊な魔道具を持って、村を周ってその年生まれた子供全員の名前と魔力を記録したときに発行されるもので、魔力により個人を識別できるようになっている。

「町に入るのも大変だろうということ、村長が持たせてくれました」

「まあ、確かになあ」

苦笑いしつつ、猫さんを見る門番さん。

ちなみに最初に静止の声を掛けたのもこの人で、他の兵士さんにテ
キパキ命令してたところを見ると、偉い人っぽい。

みたところ、30台半ばで、ちょっと生えた無精ひげが似合ってる
ダンディな人で、雰囲気からしてとても強そう……。

「あー、紹介状には、その魔物はキヤス君が飼い主で、キヤス君
の言うことをしっかり聞く。」と書いてあるが、違くないかい？」

「はい！猫さんは僕の言うことをしっかり聞いてくれますし、無闇
に何かに襲い掛かるといふこともしません」

「にゃんっ」

当然だ、と言わんばかりに一鳴きする猫さん。かわいいよ猫さん。

「本来なら、身分証があれば簡単な荷物チェックだけでいいんだが・
・・・」

「やっぱり猫さん連れて町を歩くのはまずいですか？」

「うーむ。冒険者にも魔物を飼いならしてる者もいるが、ギルドで
ちゃんと認定を受けているからなあ」

どうしたものか。

先に僕だけ行つて、ギルドに入ってから猫さんを迎えにいけば・・・
けど、猫さんがまた攫われたり、魔物と間違われて狩られたらやば
いし。

「にゃーう・・・」

「猫さん・・・！」

そんなつばらな瞳で切なそうに見つめないでくれ！！

僕が君を見捨てるわけないだろう！！

「ふう、仕方ない。俺がギルドまで一緒に行こう」

「い、いいんですか！？」

「ああ。その猫？が人を襲うようにも見えんしな。町に入れても問
題ないだろう」

さすが猫さんだ！その愛くるしさは人類共通の認識だね！

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺はハロース警備隊のグリス
だ。ギルドまでだがよろしく頼む」

「こちらこそ、お世話になります。改めて自己紹介を。キャスと申します、サイ村から来ました。こっちの大きい猫は猫さんです」

「じゃーお」

「うむ。礼儀正しいな。っと、そっちの猫？は猫さんが名前なのか？」

「あー・・・はい。そうです」

「そ、そうか」

で、冒頭の話に戻る。

なんかグリスさんに微妙な顔されたな。

しかし、仕方がない。

もし親猫さんが名前つけてたのに、猫さんに僕が勝手に名前つけたら、なんかおいしく頂かれてしまう気がする。

「あー、荷物は返すから、中身が無くなっていないか、確認しといてくれ。たまに手癖のわるいやつもいるからな、嘆かわしいことに。その間に俺は報告だけしてくる」

「分かりました」

グリスさんが申し訳なさそうに言ってくる、本当にいい人だ。

「大丈夫です、全部ありました」

報告から帰ってきたグリスさんにそう告げる。

「そうか、よかった。それでは、ギルドに行くでしょう。町の中央部にあるから、歩いて30分程で着く」

「分かりました。よろしくお願いします」

「にゃーん」

そして、ハロースでの第一歩を踏み出した。

ちなみにハロースには、婆様曰く10年以上前に通ったことがあるらしいが、さすがに覚えていないので、感覚的には初めての町だ。

ギルドへの道中、村とは全然違う町の様子に見入ってしまう。

石畳の道も新鮮だし、露店なども多く見た事も無い物があり興味が注がれる。

そこらじゅうで大きな声が上がり、活気がある。

建物も、同じような形のもが並んでいたり、石作りのものもあつたり。

人も多く、獣人も普通にいる。

きよろきよろしている僕を見かねてか、グリスさんが解説をしてくれた。

「ハロースは、イルア王国南部最大の町と言われている。

イルア王国はとても豊かな土地を有しているが、その中でも南部は、豊穡の神の祝福を受けていると言われるほどだ。

その南部と王都を結ぶ町として、収穫物が一度ここに集まるので、商人の出入りも多く活気がある。治めておられるのは、ハロース公爵だ。

町の中心部には、教会、庁舎、警備隊詰所、ギルド支部、学校がある。

町の南側、こちらのほうには、商工区になっている。宿屋もこちら側にあるから、ギルドにいつてお勧めを聞いて見るといい。俺では、魔物同伴が大丈夫な宿はちよつとわからんのでな。

色町もあるが、間違つてはいるなよ。お前じゃ真つ裸にされちまいそつだ。

北は住宅区だ。

どこもそつだが、中央は高級と名のつくものが多い、逆に外壁に近づくにつれ治安も悪くなるので、気をつけるようにしろ。

まあこんなところだな。」

「なるほど、丁寧に説明してもらって、ありがとうございます」

「なーに。俺はこの生まれだからな。お前みたいなまどき珍しい礼儀正しいやつに、この町を少しでも好きになってももらいたいからな」

「来たばかりですけど、とっても新鮮で、わくわくします！」

「そうだろう、そうだろう！なんせそろそろ秋の収穫祭も近いからな。それ目当ての商人や冒険者ももうじきすると集まってくる。更に活気がでるぞ。俺の仕事も増えるがな！」

「収穫祭ですか！村でもちよつと前にあったけど、ぜんぜん規模が違いそうだ」

「なんせ南方最大の祭りだからな。メインストリートを埋め尽くさんばかりの露店と、中央広場で見世物が毎年あるぞ。あと半月ばかりだから、余裕があったら見て行ってくれ」

「はい、そうしますね！猫さんもうまいもの好きですから」

「はっはっは。グルメなのかお前！」

「じゃーんっ」

「よし、収穫祭までに稼いで、猫さんと腹いっぱい食べ歩くぞー」

「じゃおーん！」

「元気もあつてよし！そのためにもとつととギルドで登録しないとな！」

「はい！」

よし、南方最大の収穫祭を、猫さんと楽しむためにも頑張るぞ！

第八話「いろいろ登録した日」

そして無事、冒険者ギルドハロース支部に到着。

石作りの立派な建物に冒険者ギルドの羽のマーク。

町中でも猫さんへの注目度が高く、みんな遠巻きに見てくるのでちよつと疲れ気味の猫さん。そんな猫さんも可愛いよ！

「ここがハロースのギルド支部だ。しかし本当に猫さんは大人しいな。途中で急に子供に触られても堂々としてるし。こっちが冷や汗かいたぜ」

「にゃにゃん！」

町のことを聞きつつ歩いているときに、後ろで「大きい猫さんだー！」という声と共に、女の子が猛ダッシュして猫さんに抱き着いて来たときは僕もびっくりした。

たぶん、周りの人もかなりびっくりしてたと思う。

そして動じない猫さん。

そういえば、村で散々背中に乗られたりしてたしね！

すぐにお母さんらしき人が走って来て、子供引き剥がして、謝って帰って行ったが、女の子は名残惜しそうだったな。

さすが猫さん。その抱き心地で都会の女もいちころだぜ！

「とりあえず、入るか！」

グリスさんの号令のもと、いざギルドへ！

ギルドを入ると目に入るのがひとつひとつ広く仕切られて並んでいるカウンター。ちらほら冒険者の人が座ってギルド職員さんと話をしていたり、カウンターに魔石だしたりしている。

カウンターの前のスペースは広く取られており、テーブルと腰掛がある。何人かの冒険者がくつろいで談笑している。

扉側の壁にはところ狭しと紙が貼ってあり、あれがたぶん依頼書だろう。冒険者が目を皿にして見ている。

扉右はすぐ壁になっているが、左のほうは、カウンタースペースと軽く仕切られてテーブルが並んでおり、飲み食いしてる人がちらほらいる事から、たぶん食堂か何かだろう。

グリスさんがカウンター前スペースの腰掛に向かいつつ言う。

「目の前のカウンタースペース一番右が登録専用だから、あそこいってこい。俺はこっちで待ってる」

「すみません、行ってきますね」

さっそく行くこうとするも、なんか視線を感じる……！

具体的には僕の後方への視線でした。

さすが、猫さん！その愛くるしさは冒険者も釘付けね！

しかし、むさ苦しい男どもが凝視するなんて、猫さんの何かが減ってしまう！

急いでカウンターへ。

「こんにちは。ギルドへの所属登録と、魔物の登録に来ました。」

ギルド職員の制服をきた、都会風なおばさまが対応してくれるみたいだ。

「こんにちは。所属登録と、魔物登録ですね。まずは所属登録から行います。登録にはイルア銀貨1枚掛かりますが大丈夫ですか？」

「はい、持ってます」

首から下げて懐にしまってある財布から銀貨を1枚だして渡す。

ちなみにお金は、いくらか婆様からもらっている。

「はい、確かに頂きました。こちらの代金は万が一登録ができないといった場合にも、返却できませんのでご了承ください」

「分かりました」

「あとは、身分証はありますか？」

「はい、あります。あ、あと紹介状もあるのでだしたほうがいいですか？」

「紹介状もお預かりしますね。Bランク以上の方の紹介状なら、すぐに登録できますよ。それでは確認してきますので少し待っていて下さいね」

「はい、お願いします！」

緊張している僕に優しく微笑んで奥に行くギルド職員さん。

おばさまがあと10歳若ければ僕は・・・僕は・・・！！

「じゃっー！」

お、おおっつー！じょ、冗談だよ猫さん。僕は猫さん一筋だよ！？その筋10年のベテランだよ！？

「じゃ〜ん?」

本当だって! よーし今日も一緒に寝よう!

「じゃー。じゃん」

ふう、機嫌直してくれたみたいだ。

と、猫さんとじゃれているとおばさまが再登場。

「身分証の確認がとれました。あと、紹介状のほうも魔力印からSランク、クエス氏の物であると確認がとれました」

魔力印とは、承諾や証明のために自分の魔力と専用の魔道具を使って押すものだ。

って、あの人Sランクなのかつ!

・・・ああけど不思議じゃないか。床下的にも。

Bが一流、Aが英雄、Sより上は化け物という話は間違ってたのか。

「それでは、身分証をお返しします。あとは、登録作業が終わるまでの間に、ギルドについて説明しますね」

「お願いします」

「はい。まずは、ギルドカードについて説明します。今、確認作業が終わって、ギルドカードの作成を行っております。

ギルドカードは、ギルド所属を示すカードとなっており、高いレベルの身分証となっております。各支部のギルドで使える他、ギルドがある国家への入国が可能となっております。魔力によって識別されますので、盗難されても悪用されることはありませんが、紛失すると再発行に約10枚の銀貨がかかりますので、大事に扱ってください。

また、どこの国においても、犯罪等で手配されますと、ギルドカードは失効になります。刑が終わりますとまたお作りすることができますが、再発行扱いになりますのでお気をつけください。

次に、ギルドランクと依頼について説明します。

ギルドランクとは、冒険者の方々の主に戦闘における力によって、下はGから上はSSSまであります。皆様最初はGからのスタートとなっており、その方のランクにあった依頼を10個以上達成することによって、次のランクへ上がることができます。例外的に、ギルドマスターが認定した場合には、ランクアップが可能です。

依頼は、各ギルドに依頼板がありますので、そこに張ってある依頼書から自分に合った依頼を選び、カウンターまでお越しください。自分のランクより上の依頼を受けることはできません。下の依頼を受けるのは自由ですが、あまり下の依頼ばかり受けると、注意を受けますので気をつけてください。

万が一、依頼に失敗した場合、ペナルティーが発生します。重大な

失敗や、何度も失敗をするとギルドランクの降格、またギルドカードの失効がありますので注意してください。

また、依頼内容によっては、戦闘力を必要としない、特殊依頼があります。それについては、依頼書にランク分けはなく自身の判断で受けることができます。こちらもちろん、失敗のペナルティーがありますので、お気をつけください。

依頼を達成なされた場合には、ギルドカードに細かい依頼内容と共に記録されますので、それを基に指名依頼をギルドから出される場合もあります。ほとんどの指名依頼は、特殊依頼に分類され、通常より高い報酬が用意されていますので、受ける受けないは個人の自由となっておりますが、受けていただくとギルドと、より良好な関係が築けるかと思われれます。

万が一、依頼内容に不備があつた場合には、ただちにお受けになつたギルドに報告をお願いします。そのクエストはキャンセルされ、確認をとつた上で、準備にかかつた費用なども返却されることがあります。

次に、両替について説明します。

両替は各国どの支部のギルドでも行われておりますので、もし国外に行くご予定がありましたら、ご活用ください。

次に、買取について説明します。

ギルドでは、魔力石、魔物の特定の部位について、買取を行っております。どちらの買取値段も、後ほどギルドカードと共に、お渡しするギルドガイドブックに載っておりますので、詳しくはそちらで確認して下さい。ただし、買取値段は参考値段ですので、それより上下することが多々あります。お気をつけ下さい。

ギルドに関する全ての事柄につきましては、カウンターまでお願いいたします。この説明は全て、後ほどお渡しするギルドガイドブック

クに細かく載っておりますので、一度目を通しておいいただきませう、お願いいたします。

最後に各支部のギルドの見分け方ですが、全てのギルドに羽のマークの看板を出しております。こちら、『どこまでも飛んでゆける』冒険者の方々を表しております。我々はどこまでも飛んでゆけるように、皆様方のサポートをやっていきますので、どうぞよろしくお願いたします」

「はい！よろしく願います！」

あーたーまーがまわるー。

いっぺんには覚えられないな、あとでちゃんとガイドブック読もう。

「はい、それでは何か質問ありますか？」

「えーっと、魔物登録に関しても、説明してもらっていいですか？」

「あら、そっちは登録時説明マニュアルに無かったから忘れてたわ」

なんとというマニュアル！

「こほんっ。説明の前に。魔物登録には、イルア銀貨1枚が必要ですが大丈夫ですか？」

「はい。これをお願いします。」

またもや、首から下げた財布から銀貨を出して渡す。

はやく依頼こなさないと、まだ少しはお金あるけど懐が心配だ。

「はい、確かに。それでは、魔物登録についてご説明いたします。魔物登録をなされると、連れている魔物があなたの保護下にあるものとして扱われます。ギルドカードにその旨が登録され、ギルドがあるどの都市に魔物を連れて入っても、制限が掛かりません。ただし、魔物が犯罪を犯した場合などは、あなたにもその罪が及びますのでお気をつけください。」

もちろん、魔物を連れての依頼達成も、あなたの依頼達成とみなされませんが、魔物死んだ場合、ご報告いただければご本人の意思により、ギルドランクの格下げも行えますので、覚えておいてください。魔物が逃げた場合や、逃がした場合、ギルドへ速やかに報告してください。」

登録には、とても厳しい審査があります。頑張ってください。」

「はい。ありがとうございます。頑張ります！」

ここでミスすると、猫さん送り届けるのが非常に大変になってしま

う。
頑張らないといかんね！

「それでは、もうギルドカードもできていると思いますので、少々失礼します」

と言って奥に行くおばさま。

「こちらが、ギルドカードとギルドガイドブックになります。先ほど言いました通り、再発行には銀貨10枚がかかりますので、大事に扱ってください」

「はい、ありがとうございます」

手のひらサイズの銀のカードと、分厚い本を頂いた。

「さて、続いて、魔物登録審査を行います」

「はい！」

よしー！がんばるうぜ猫さん！

「にゃん！！」

第九話「続・いろいろ登録した日」

「試験は裏の広場でやりますので、すぐ右手のほうに扉の前でお待ちください」

扉の前に立つとすぐに、鍵が開いた音と共におばさまが出て来る。

「こちらの廊下から裏手に行きますので、着いてきてください」

「はい！」

「にゃん！」

そしてギルドの建物の裏の広いスペースに移動。

木人形なんかもあるので、修練とかに使うのかな？

そして、50台くらいのおじいちゃんが仁王立ちしてる。

「あちらの方が魔物登録試験の試験官ですので、試験を受けてきてください。また後程会いましょう」

「はい、行って来ます！」

と言うわけで、おじいさんの前へ。

「魔物登録試験を受けに来ました、キャスと申します。こっちは猫さんです」

「きゃんっ」

「ふむ、礼儀正しいの。わしは魔物登録試験、試験官のバードと申す。よろしくな」

「はい。よろしく願います！」

おじいさんまじ怖い、雰囲気ですべて倒される・・・

猫さん、おらにちからを！！

あと神様もできたらお願いします。

「この試験は、様々な状況下で、魔物が主人の言うことを聞くか、人に遅いかなることがないかを見極めるためのものだ！いろいろな

状況を再現するため、とても時間がかかる。そして一回でもミスをすると一週間、再試験はできない。また、試験内容も毎回違うので気をつけるように。

それでは、試験を開始する！！」

「はい！」

「にゃーんっ！」

バードさんの号令のもと、長く厳しい戦いがはじまった！

まずは、普通に主人の後ろをついて歩くか。

そこから、どこまで細かい命令を聞くかとか、どこまであいまいな命令を聞くかとか、とにかくいろいろいな命令を猫さんにした。

そのあとも、どのくらい強い衝撃まで攻撃と認識しないか等々。

エトセトラ、えとせとら・・・

僕たちの戦いはこれからだ！

試験があまりに長く、僕も猫さんもくたくた、終わったときには日が傾いていた。

「よし、試験は無事終了じゃ」

「は、はい」

「にゃ、にゃーん」

「早速結果発表じゃが。ここまで息のあった人と魔物を見るのは初めてじゃ！おめでとう、文句なしに合格じゃ！！」

「や、やったー！！」

「にゃにゃーんっ！！」

もう僕ら夫婦だよね、猫さん！

さて、バードさんと共に、建物の中へ再度移動。

僕はカウンタースペースまで戻り、バードさんはこれから登録作業をしてくれるそうだ。

「おう！キヤス君、試験どうだった？」

「グリスさん！！すみません、お待たせしてしまつて。試験受かりましたよ！！いま登録待ちです」

「一応仕事だから、気にするな。それより、おめでとう。よくやったな！」

「ありがとうございます！」

「じゃん！」

「それだけ息ぴったりだからな。そんなに心配じゃなかったが、受かつて何よりだ、それじゃあ、俺は一応確認だけ取つて報告に帰るとするか」

「遅くまでありがとうございます！」

「おう」と言つて、そのままカウンターに行くと、おばさまと2、3言葉を交わして、グリスさんが戻つてきた。

「よし、それじゃあな！何か困つた事があつたら、すぐそこが警備隊の詰所になつてるから、俺の名前だせばすぐ駆けつけるぞ」

「分かりました！何かあつたらお願いします！」

「おう、じゃあな！しっかり稼いで、収穫祭楽しむんだぞ！」

出ていったグリスさんの背中にお辞儀をする。

お使いに出て初めての町で、こんないい人にで会えるなんて幸先いいな！

すぐにカウンターに呼ばれて、おばさまからギルドカードを受け取る。

「裏の記載事項に、魔物認定が書かれておりますので、魔物関係でなにかあった際は、そちらを提示ください。」

「分かりました」

「何か質問等ございませんか？」

「えーっと、魔物同伴が大丈夫な宿屋つてありますか？」

「そうですね、昔から魔物を連れている冒険者はいますので、馬小屋等ある宿屋ならば、相談すれば大抵泊めてもらえますよ。ただ、魔物と一緒に部屋となると、かなり高い料金になって

くると思われます」

「そうですね、わかりました。ありがとうございます」

「いえいえ。もう日も傾いてきましたので、宿屋を探しにいかれる

といいでしょう。依頼に關しましては、ギルドは24時間開いておりますので、都合のよろしい時間にお越しください。

それでは、本日はお疲れさまでした。」

「お疲れさまでした。お世話になります！」

そして、ギルドを出るともう日も大分傾いている、早めに宿をさがしたほうがよさそうだ。

人ごみを避けつつ、宿街に向けて移動していると前方から来ていた小さい人影にぶつかった。

「おっと、すみま・・・せん？」

謝ろうとしたときには、すでにその人影は雑踏の中に消えていた。

はたと気づいて、ポケットをあさるも財布がない。

スられた?!

さすが都会・・・なんという早業。

とりあえず、首からさげている銀貨が入っている財布は無事だったのでまだいいか。

婆様に言われた通り、銅貨と銀貨は分けておいてよかった・・・。

しかし、とても幸先がよかった日の最後に、こんなけちがつくなんて。

「はあ、ついてないなあ」

「にゃ〜ん」

猫さんありがとう、元気出すよ！

「よし、気を取り直して、宿探しにいこう〜！」

「にゃにゃーん〜！」

第十話「小屋で寝た日」

やってきました宿街。

日も落ちてきて、そこらかしこに明かりがともって、宿屋兼酒場といつところが多いみたいでにぎやかだ。

馬小屋がある宿屋を中心に、交渉して周るとしよう。

「こんばんは。部屋の空きはありますか？」

さっそく目に入った宿屋に入って聞いてみる。

「お、いらっしやい。・・・あー、魔物はちょっとうちじゃあ」

僕の背後を見て言いくそうに告げる店員に、こちらも申し訳ない気がしてくる。

「そうですか。分かりました。よければ、魔物が大丈夫な宿屋を紹介して頂きたいのですが」

「おお！それなら、大樹の枝亭がいいぞ！安いしサービスもいい。魔物も専用の小屋がある。獣人の夫婦がやってて、うちをでたら左に曲がって、ずっと行くと左手にあるぞ」

「分かりました、丁寧にありがとうございます」

お礼を言って、早速大樹の枝亭を目指す。

「お、あそこかな」

看板と宿の建物の横に魔物用であろう小屋があるので、間違いないだろう。

「こんばんは。魔物連れなのですが、部屋の空きはありますか？」

入ってすぐのカウンターにいた獣人の女性に声をかける。

「いらっしやいませ。魔物連れだね。部屋は空いてるよ。魔物小屋のほうも今は空っぽだけど、一応ギルドカードで魔物登録されてるか、確認しないと泊められないんだよね」

「あ、登録は済ませてあります。これがカードです」

「はい・・・確かに。それじゃ、合わせて一泊銅貨30枚になるよ。飯は別にかかるから、うちで食べるなら少し安くなるよ」

「それでは、とりあえず10日分です」

「はいよ、それじゃ、銀貨3枚に確かに受け取ったよ」

「えっと、キャスって言います、こっちは猫さんです。よろしくお願ひします」

「にゃーん！」

「はっはっは、賢そうな魔物だね。私はリリーム、見ての通りの宿屋の女将さね。で、あっちでのキッチンを仕切ってるのが旦那のガリオンさ。いい男だよ！食堂で注文とってるのが娘のリリーンよ。可愛いけど手は出すんじゃないよ」

リリームさんは、獣の耳と尻尾が特徴的な緑の髪の毛の30台女性だ。

ちらつと左手の食堂の奥に見えるガリオンさんは、一見獣人に見えないが、背が高く筋骨隆々のスキンヘッドだ。

リリーンちゃんは確かに可愛いが、10歳くらいの、母親そっくりの耳と尻尾で緑髪の子だ。

「これがあなたの部屋の鍵、2階の一番奥だよ。で、こっちが魔物小屋の部屋の鍵、これは入って一番手前だよ。魔物を入れたら外から鍵をするようにね」

「分かりました」

「にゃっ！にゃくにゃん！にゃー！にゃー！にゃー！にゃー！」

「おっ、おっ。どうした猫さん、そんな引つ張らないでくれ」

「にゃん。にゃにゃ、にゃにゃー。」

ううん、なんだ、何かわすれ・・・て・・・

ハッ！

ごめんよ猫さん！今日は一緒に寝ようって言ったじゃないか！

「すみません、リリームさん。できれば猫さんと一緒に寝たいんですが、できますか・・・？」

「は？魔物と？あんた正気かい！？」

「え、ええ。猫さん見た目通りちょっと大きいだけで猫ですし。賢いので！」

「はあ。そうかい。それじゃ、魔物小屋のほうなら今空っぽだし、一日くらいならいいけど。毎日だめだよ？あと鍵は閉まらないよ？」

「わかりました、すみません、わがまま言っつて」

「なーに。あんた、なかなか面白そうだしね。明日、怪我してないことを祈りなさいな。あと、今日の分の部屋代は無しにしてやるから」

「え！？けど・・・」

「子供が遠慮なんてするもんじゃないよ！いいから大人の厚意は受け取るときな！」

「はい！ありがとうございますー！」

「はっはっは、素直でよろしい。それじゃ、小屋のほう準備しとくから、ご飯まだなら済ませちゃいな」

そう言ってリリームさんが小屋のほうへ。

僕と猫さんは食堂のほうへ移動。食堂はこれから込み合いそうな感じなので、適当な席に座ってメニューをみつつ、リリンちゃんにさっそく注文をする。

「いらっしやいませ。あの、宿のお客さんですよ。私リリンっ
ていいます、よろしくお願いしますー！」

「僕はキャス、こっちは猫さんって言っただ。よろしくね。いまさ
らだけど、魔物もここで食事して大丈夫なのかな」

「あ、はい！大丈夫ですよ。」

「そうなんだ。教えてくれてありがとう。田舎物から出てきて、初めての都会だからいろいろ教えてくれるとうれしいな」

「もちろんです！」

そんな会話のあとに、今日のお勧めと、魔物用のご飯を注文。ちなみに猫さんはなんでもおいしく食べるし、量も僕と同じでいいので、注文が楽だ。

普通の魔物だと、食べれないものとか量とか指定しないといけないので、料金計算とかで結構注文にも時間がかかるらしい。

「お待ちどうぞさまですー！」

そうこう考えていると、目の前においしそうなシチューが登場！

「こちら本日のお勧め！ナナメ鳥のシチューです！そしてこっちは猫さんのご飯です！」

猫さんの前には、綺麗に切られたお肉と野菜、フルーツがそれぞれのお皿に並んでいる。

「おおー、おいしそうだ。頂きますー！」

おいしいご飯に、今日一日いろいろあったこともあり、大分空腹もあって、瞬く間にシチューが胃袋に消えていった。

横を見ると猫さんもおいしそうに、フルーツの最後の一切れを頂いてるところだった。

そして、二人揃ってご馳走さま。

お金を払って宿のカウンターに戻ると、リリムさんが待っていた。

「小屋の準備はしといたよ。鍵も一応渡しておくけど、外側からしかかからないからね。最近寒くなってきたから、毛布おいといたから使いな」

「何から何までありがとうございます」

「気にするんじゃないよ！しっかり休みな」

「はい、おやすみなさい」

「ええ、おやすみ」

というわけで、小屋に移動。

部屋に入ると、綺麗に藁が敷き詰められており、上には毛布、ランプが置いてある。

「今日はいろいろあったねえ、いいことばかりじゃなかったけど。まさかスリされるとは……」

「じゃ〜ん」

「けど、ギルドで登録もできたし、いい出会いもあったし、総合的にはいい日だったんじゃないかな」

「じゃじゃん」

「そうだね。そろそろ寝ようか」

毛布を猫さんと被りつつ、猫さんに抱き着いた体制で就寝。

空が白みがかったころ、物音がするので起きると、隣に猫さんがおらず、ちょうど部屋のドアから入ってくる猫さん。

その口には、気絶している子供が啜えられていて……

「あれ……一日にして、認定取り消しの危機!？」

番外「ヒロインは・・・」(前書き)

ヒロイン予定の一人をだしてみるテスト。

番外「ヒロインは・・・」

僕の名前はユウリという。

オーステス大陸にあるイルア王国の南、サイ村の出身だ。

昔は凄腕冒険者、今は凄腕村人の父と、昔は可憐な貴族令嬢、今は美人で料理上手な母の3人家族だ。

母親似の容姿、父譲りの赤髪が特徴で、父にはよく「将来ママみたいな美人さんになるぞ!」と言われて育った。

今思えば、父のこの口癖が僕に多大なる影響を与えていたのかもしれない。

幼少期のころ、男の子の遊びをするより、女の子と遊んだほうが楽しかったのをよく覚えている。

僕が女性ならまったく問題ない話であったのだが、実際問題僕は男性であったために、幼いながら苦悩した。

子供のコミュニティと言うのは馬鹿にできず、人生のほとんどを村で過ごす村人にとって、子供時代の関係とは将来に渡る関係となる。

そこまで難しいことは当時考えていなかったが、男女の区別がつくようになるにつれ、仲間はずれや悪口を言われるようになった。

そんなときに彼に出会った。

彼は、村の薬師のおばさまの養い子で、当時は村に来たばかりの6歳くらいだったはずだ。

いつもおばさまの後ろを歩き、拙いながらも薬師の手伝いをしていた。

おばさまが、何度か子供たちの集団のほうを指さして、「遊んでおいで」と言っても首を振るだけで、結局おばさまの後についていったのを、なぜか今でも鮮明に覚えている。

おばさまは、元々名のある薬師で、10年くらい前にサイ村に居を構え、小さい村に薬師自体珍しく、腕がいいとなればなおさら珍しく、とても有難い存在であるために、村では尊敬を集めている。

そんなおばさまの養い子である彼、キャス君はおばさまから片時も離れず、仕事を手伝っていた。

当時、子供たちも、いきなり来たたよそ者をどう扱っていいか、分からなかったのだろう。積極的に遊びに誘ったりということもなかった。

しかし、子供というのは親を見ているもので、おばさまが村で瞬く間に尊敬を集めると、その養い子であるキャス君も子供たちの興味の対象となり、彼ももともと人懐っこい性格をしており、気づいたときには村の男の子たちと遊んでいる姿を目にするようになった。

そんなある日のことだ。

その日、女の子たち遊ぶために、遊び場に向かっていた僕は、村の年長の男の子たちに目をつけられ、「お前もサイ村の男なら、度胸

試しをやれ！」と、川の少し高く出張っている岩の上に連れてこられた。

今にして思えば、気になるあの子と、男の僕が遊んでいるのが気に食わず、周りに人がいないタイミングを見計らって、少しいじめてやるうと思っただのかもしれない。

散々ヤジを飛ばされ、段々泣きたくなくなってどうしていいか分からなくなっていく、気づいたら川に飛び込んでいた。

そこまで深くも、流れも早い川ではないので、普通の子供ならおぼれる事は無い川なのだが、いかんせん僕は、ほとんど川遊びもせず、またこのとき、薄いながら服を着たままだだったので、思うように体が動かず、それはもう慌ててしまった。

だんだん意識が遠のく中で、最後に見たのはキャス君の必死に顔だった。

気がつくくと、薬の独特な匂いが漂うベットだった。

横を見ると、父と母とおばさまがいて、父が僕が目覚めた事に気づくと慌ててこっちに来た。

「おい！ユウリが目覚めました！おばさま！」

「あら、本当ね。けどクエス、嬉しいのは分かるけど邪魔だからどきなさい」

「そうね、あなた。いきなりそんな顔で迫ったら、ユウリがびっくりしてまた気絶しちゃうでしょ」

父がしゅんとして、離れていく。

「気分はどうだい？ユウリ。痛いところとか無いかい？」

「痛いところはありません」

「そうかいそうかい。それはよかった。いきなりうちの坊と子供たちがユウリを担いできたときにはどうしたかと思ったけど」

「あ、そういえば、僕、溺れて・・・？」

「そうだぞ、ユウリ！服着たまま川に飛び込むなんて！」

「あなたは、少し黙っていなさいね」

母の一睨みで父はまたしゅんとなった。

「溺れてたところを、たまたま川沿いで遊んでいたキャス君たちが助けて運んでくれたのよ」

「キヤス坊は見所のあるやつだと思っていたが、さすがおれの見込んだ男だな！」

「キヤス君が……」

「それで、何で溺れていたの？」

「うむ。夏とはいえ、服着たまま川に飛び込むなんて、やっちゃいかんぞ！」

父母に真剣に見つめられ、村の年長の男の子たちに連れられていかれ、度胸試しをさせられたことを話した。

「よしちよつと行ってくる」

剣呑な気配をまもって父が立ち上がった。

「落ち着きなさい、あなた。ユウリが怖がってるわよ」

「むう、しかしだな！」

そこへ、扉を開け村人が駆け込んできた。

「おばさま！子供たちが腹痛起こして大変なんだ！まだ3人だけど、うつるもんだつたらまずいだろうつてじじさま方が言うんで、家まで行って診てくれんか！」

「落ち着きなさい。どこの子が腹痛を起こしているの？」

「ええつと、うちの息子と、コムサのところ長男と、タンダのころの次男だな」

「ん？なんかそいつら、覚えがあるな」

「ユウリに意地悪した子たちじゃない」

「おお！そつだそつだ！天罰でも当たったか！さすがユウリ、神にも愛されているな！」

「クエスはちよつと黙つてなさい。センリ、あなたのところの息子は、何か悪いもの食べたか聞いている？」

「お、おお。おらも聞いたんだが、夕飯前だったから、朝も昼もおらと同じ物たべとるから、違うものと言えば、おばさまのところの坊から貰った団子くらいみたいだ」

「そつ。それなら害はないわ。腹痛もすぐ治まるわ。今日あの子が摘んでたのが、たまたま便秘に効く弱い薬草でよかったわね」

「ど、どついつことだ、おばさま！？」

「うちにある薬草は摘んできたら、ほとんど私の部屋においてありますからね。あの子には、危ないから私の部屋には入らないように

言っておりますから。あの子が見える薬草はその日摘んできたやつ
しかなかったのでしょうか」

「そ、そうじゃなくてだな！なんで坊にうちの息子らが一服盛られ
てるんだ！」

「それは私の後ろの人たちに、聞くのがいいかと思うわ」

それから、母が説明し、父が怒り、センリさんが縮こまり、結局コ
ムサさんとタンダさんのところに行っているいろ、おはなし、した
そうだ。

僕は、一日ばばさまのところに泊まることになって、父たちが出て
行くのを見送ると、ばばさまに横になっているようにいわれて、毛
布にくるまり目を閉じると必死にこっちに手を伸ばすキャスクんが
思い浮かんだ。

なぜだか胸もどきどきしている。

も、もしかして？けどキャス君は男だし、僕も男だし。

けどけど、キャス君は溺れている僕を助けてくれて……。

なぜか仕返しまでしてくれて……。

けど……だけど……でも……。

一人になって、急にとめどなく思考が流れていく。

なんでこんなにどきどきするのか。

キヤス君の顔を見て、お話すればはつきりするんじゃないか。

キヤス君に会いたい、お話したい！

そう思っていると、話し声が聞こえてきた。

「キヤス、あなたは何をしたのかわかっていますね」

「はい……ごめんなさい」

「理解して反省しているようですし、強くは言いませんが、薬師として教えていることは、このようにことに使うためじゃないことを覚えておいてね」

「はい……」

「この話はここまでね。ユウリは客室で寝てるから、様子を見てらっしゃい」

キヤス君……、僕のためにしてくれたのに。

ああ、どうしよう。さっきまで会いたいと思っていたけれど。

今は会うのが怖くなってきた。

それでも扉は開いて。

「ユウリ、入るよ？」

キヤス君がベットの脇まで歩いてきたが、僕は結局寝た振りをしてしまった。

僕が寝てるのを確認すると、彼はやさしく呟いた。

「ユウリをいじめた馬鹿3人はしっかり懲らしめといたから、安心して。婆様には怒られたけど仕方ないよね。反省はしているけど、後悔はしていないってやつだ。」

キヤス君は、ままた出て行こうとしたので、ついひきとめてしまった。

「キヤス君！助けてくれてありがとう。ごめんね、僕のせいでおばさまに怒られて・・・」

「あれ、ユウリ起きてたのか。どういたしまして。仕返しは僕がしたくてしたことだから気にしないで」

「うっん、うれしかったから。ありがとう」

「それならよかった」

やさしく笑いながら、見つめられて僕はどんどん頭に血が上るのを感じた。

それから少し沈黙が続き、焦った僕は、さっきの苦悩もあり、とんでもないことを言ってしまった。

「きゃ、キヤス君！僕は本当に君に感謝してるんだ。お礼に、ぼ、僕が大人になつたら、キヤス君と結婚する！」

言うてから、じぶんでもすごいことを言ったと気づいたけど後の祭り。キヤス君が何か言っただけど、毛布を被って恥ずかしさのあまり丸まっていたら、そのまま寝てしまっていた。

けど、このとき告白して、僕ははっきり自分の気持ちに気づくことができたんだ。

次の日、両親に連れられて家に帰宅。

父は何でも、「ちょっと一週間くらい山籠ってくる」と言って、なぜか例の3人と一緒に山に向かっていった。

僕は、昨日のことがぐるぐる頭を巡っていて、ぼーっとしてしまっている、母にどうしたのか聞かれて、結局全部暴露してしまった。

そうすると、母が魔法に関する本を何冊か引つ張りだしてきて、その一文を読んでくれた。

「『古代の遺跡から発見された魔道具には、使い方が分からない物や、欠損があり効果が安定しない物などがある。私自信も、遺跡から発掘されたとある魔道具の研究をしていたところ、暴走させてしまい、性別が変わってしまった。そのときは、もう一度暴走させることで、性別を戻すことができたが、そのあとは何度やっても、そのような効果を得ることはできなかった』
こういふ魔道具が、世界にはあるみたいよ」

その日から、僕は母に魔法の勉強を教えてもらおうようになった。

それはもう、遊ぶ時間すら惜しいほどに必死に勉強した。

キヤス君も魔法に興味をもって、一度母に習いに来たけど、母がキヤス君には才能がないとはつきり言ってしまったため、何度か来ただけで、全然来てくれなくなったときは、母を恨みもした。

そして、12歳になり、あの本を書いた魔法使いがいるウルテマ学術国の魔法学院への留学が決まり、出発の日。

勇気を出して、キヤス君の手を握り、

「僕のこと忘れないでね。」

と言つて、村を出発した。

キャス君も、涙を溜めて首を大きく振つてうなずいてくれていたの
で、きつと想いは通じてる。

僕は、決意と共に村を後にしたのだ。

番外「ヒロインは・・・」(後書き)

だが男だ！

第十一話「弟子ができた日」

と、とりあえず、落ち着け僕。

「にゃーん？にゃんにゃん」

すいいでしょ、どろどろ？ほめてほめて。って感じですよね猫さん。

確かに、大きい獲物だろうけど！だろうけども！..!

「うちじゃ養えません！もとあったところに返してきなさい！」

「にゃ！？にゃにゃーん、にゃっにゃっ」

なぜか慌てて子供をさらにつっちにおしつけて・・・お？猫さんの口になんか挟まってるな。

「これは僕の財布？あれ、ってことはこの子・・・？」

夕方のスリか！！

灰色のぼろぼろローブに、背丈も同じ。

「猫さんは犯人を捕まえてきたのか」

「にゃー！にゃん！」

さすが猫さんだ！！丘の上の白い家に子供は3人、犬一匹、静かに暮らそう！

「ありがとう猫さん！明日も一緒に・・・あ。けど毎日はダメって言われたからな・・・」

「にゃーう・・・？」

ああそんな悲しそうな顔で鳴かないで！

「よ、よし、こっそり！こっそり一緒に寝よう！」

「にゃー！にゃん」

ふはは、よしよし可愛いやつめ！

「・・・ひひひ」

おっと、スリ（仮）さんが起きてしまう。

とりあえず、縛っておくか。

「うづん？あれ・・・どこどこ・・・？」

起きたな。

「寝てたらいきなり大きい獣が目の前に・・・」

「にゃん」

「っ！？ま、魔物！？わ、私を食べてもおいしくないよ！？肉付きもよくないし！」

「あー、混乱してるところ悪いけど・・・」

「！！あんたは・・・。ハッ！お、オレを攫っても金にはならないぞ！こ、こんな貧弱な男じゃ、値もつかないからな！」

「別にお金を要求するわけじゃないけど。僕の財布をスったのは君だよな？」

「な、そ、そんなことしてないぞ。夕方はスラムにいたし！」

「ああ、うん。夕方、ね・・・。まあ、君と一緒にこんなものも出

てきたんだけど、僕の財布だから返してもらおうよ。小銭しか入れてないけど、一応大事な人から貰ったものだからね」

「す、好きにすればいいだろ！お、オレは何もしらないぞ！」

「あー、はいはい。まあ、あんまり人さまの物に手をつけないようにね。この子が加減間違えるってこともあるかもしれないし」

猫さんをなでつつ、一応忠告しとく。

「お、オレだって人を見て商売してる！今回はたまたま、運が悪かっただけだ！」

「・・・お前そんな正直モノなくせによくスリなんてやってるな」

「な、あ！・・・だましたな！」

「いやいや、勝手にしゃべっただけじゃん！」

「う、うるさいうるさい！お、オレを警備隊に突き出すつもりか！？」

「いやいや、財布じたい諦めてたけど、猫さんが見つけて持って帰ってきてくれただけで、君は猫さんがついでに持って帰ってきてきちゃった？感じなんで、もう帰っていいけど、取り返すつかなくなる前に犯罪はやめて、職を探したほうがいいと思うっつよ」

昔、都会に住んでたじいさんが村にいて、いろいろ聞いた話の中には、手癖の悪い子供がたまたま手を出したのが冒険者の懐で、子供の腕一本消えた、なんて話をしてたからなあ。

しかし静かだ、何か言い返されるかと思ったのに。

子供の様子を見ると、うつむいて震えていた・・・

「何も知らないくせに！！スラムの親なしの子供が、一人で生きていくのがどれだけつらいか！スラムの子供なんて、雇ってくれるのはもっと危ないところか、色町の店くらいさ！まだ、スリをしてゴミを漁っていたほうが長生きできる！」

涙を浮かべて叫ぶ姿を見て、かなりショックを受けた。

自分と同じか、少し年下の子供から、そんな言葉がでてくるなんて・・・

僕は、両親はいなかったけど、ずっと婆様に守られて生きてきた。

だから、知らないことがたくさんある。

なのに偉そうに、職を探せと言うのは軽率な発言だったな。

貧しい人みんなに職を探すなんて、僕にはできない。

けど、関わってしまったのなら、せめてこの子は助けたい。

取り返しのつかなくなる前に……！

「職を探したほうがいいなんて、軽い気持ちで言ったのは悪かった」

「あ、いや、お、オレも、財布盗んでおいて、偉そうにわめいてごめん……」

「いや、気にしてない。けど、取り返しのつかなくなる前に、やめてほしいってのは本心だ」

「お、オレだってやめれるならやめてる！けど、他にできることがない……」

「僕が、お金を稼ぐ方法をおしえるよ」

「はあ！？お前が!？」

「こつ見えても、凄腕薬師の弟子なんだ。ハロース周辺で採れる薬草と、薬の作り方をおしえるよ。冒険者向けに作って、露店にだして売れば稼げるはずだ」

今日、ギルドの行くときに露店の品物をみたけど、結構簡単な傷薬やらがそこそこの値段で売ってたし、どうにかなるはずだ。

最悪、僕もそれで稼ごうと思ってたし……！

「な、なんでそこまでしてくれるんだ？お、オレに返せるものなん

てないぞ？」

「うーん。軽率な事言っただけで傷つけたお詫びと、大事なことに気づかせてくれた御礼かな？」

「なんだよ、それは……。けど、教えてくれるなら、習いたい。」

「よし、決まりだ。それじゃ、細かい話は宿でしょうか、部屋もとつてあるから」

「え、お金なくて馬小屋で寝てたんじゃないんだ？」

「あー。猫さんと添い寝するために小屋で寝ただけで……」

「そ、そうなのか」

ひ、引かれた！！

「と、とりあえず、移動しようか！そろそろ朝食の時間だろうし！おこるよー！」

「いいのー!？」

「僕の指導は厳しいからね！しっかり体力つけないとね」

おっと、すっかり忘れてた縄を解いてっつと。

あ、そういえば自己紹介も忘れてた！

「宿に行く前に。僕の名前はキヤス、冒険者だ。こっちは相棒の猫さん、器量よしの猫っばいなにかだ。よろしくな！」

「お、オレ……じゃない。私はレカです。南のスラムに住んでます」

「ん？もしかして女の子？」

「うん……はい。普段は、男に見られたほうがいいので、男のふりをしてるんだ……です」

「なるほど」。あと無理に敬語じゃなくていいよ

「い、いいの？」

「いいよいいよ。ただし、僕の話は師匠と呼ぶように！」

「し、師匠？分かった！キヤス師匠！」

師匠……なんて甘美な響きなんだ！！

「よし、それじゃ、食堂までいこうか！」

「はい、師匠！」

第十二話「からまれた日」

宿の食堂でご飯を食べると、リリームさんに部屋の鍵を貰う。

そのときに、レカンについて聞かれたので、僕が薬師だということをお話して、その弟子ということだけ伝えておいた。

そのまま部屋に入ると、狭いながらベットと机があったので、僕は机の椅子に腰掛け、レカをベットに座らせて話をした。

「まず、レカにはある程度、ゴブリンくらい倒せるだけの力を身につけてもらいたいんだけど、現時点で倒せるかな？」

「私、町の外には出た事無くて。魔物を見るのも師匠の猫さんがはじめてで……」

ちなみに猫さんも部屋にいる。

リリームさんに「あんたのところの魔物はやたら行儀いいわねえ。

普通、魔物は寝るときに人が近くによったら無条件で吼えるから、宿とは別の小屋なのに、あんたのこの子は、昨日夜様子見にいったときに、ぜんぜん吼えないで、ただジーンと私を見てるだけだったのよ。そんだけ黙できてるなら、部屋のほうで一緒に寝てもいいわよ。ただし、うるさかったら小屋に逆戻りだけどね！」と言われ、晴れて部屋で一緒に寝るようになったのだ。たぶん、僕が今日も猫さんと一緒に寝ようと企んでたことなんて、お見通しだったんだろうな……。

しかし、これで今日からも一緒に寝れるよ猫さん！旅に出てからずつと一緒に寝てたからね、もう僕猫さんなしじゃ夜も寝れない体に・

「師匠？」

「ハツ、ちょっと考えごとしてた。ごめんごめん。とりあえず、僕もそこまで蓄えがあるわけじゃないから、今日さつそくギルドの依頼なりを受けて、できればお金を稼いでおきたいから、なるべく町の外の簡単な依頼を受けて、道中薬草についての説明とか、戦闘についてを教えていこうと思う、ここまではいいかな？」

「はい！」

「よし、次は、レカの装備についてだけど、なんか武器になるようなものは持つてる？」

「えっと、何かあったときのために、ナイフなら一応、寝床にある」
「よ」

「そっか、それじゃ、後で取りに行こう。あとは防具は、ゴブリンくらいなら気にしないでいいけど、あとで服と靴は一式揃えようか」

「え、このままじゃだめ？」

「お金は出すから。ボロボロの服と靴じゃ怪我するし。」

「うー、分かったよ」

「じゃあ、まずはレカの服と靴を揃えて、それからレカの家に行つて、ギルドにいこうか」

「あれ？もしかして、師匠も私の寢床くるの？」

「ん？そのつもりだけど、だめなの？」

「い、いや、いいけど。スラムは危ないから」

「こつ見えても、猫さんは強いから、何かあっても平気だよ」

「にゃん！」

「そつか。うん、わかつた。けど、寢床すごいぼろいからな！驚くなよな！」

「はいはい、わかりました。それじゃ早速行こうか」

「はい」

「にゃん」

それから、朝の商工区を周って、冒険者御用達つばいところで、とりあえず安い靴と服を購入してそのままレカに着せる。

次に、レカの家に行くために南スラムに入る。

商工区とは雰囲気ガラッと変わって、なんとも暗い感じだ。

ちよつと行くとすぐに、家というか小屋というか廃屋というか、そんな建物？が見えてきた。

「ここが私の寢床だよ」

「あーうん。引っ越そうか」

「え！？急にどうしたの師匠！？」

「うん、これはさすがに」

「だから、ぼろいって言ったじゃん！」

「僕と一緒にの宿でいい？」

「え、もう引っ越すの決定なの！？」

「うん。ちゃんとした環境じゃないと、技術っていうのは身に着かないよ！」

「いや、薬って別に寢床は関係ないんじゃない？」

「師匠の言葉に反論しない！お金なら出すから、とりあえず宿に引っ越そう？」

「うー、分かったよ師匠。けどどっちにしろ、ここもそろそろ危ないと思ってたから、引っ越そうと思ってたし。お金は借りとくだけで。あとで絶対返すから！」

「分かった。薬で稼げるようになったら、返してくればいいから」
「それだと結局師匠におんぶに抱っこだけど……。約束だからね！お金稼いだら、絶対受け取ってよ！」

「はいはい。それじゃ、ひとまず荷物まとめて、大樹の枝亭に行こうか。そのあとギルドに行こう」

それから、十分もしない間にレカの荷物が纏まった。僕は、レカのあまりの荷物の少なさにびっくりして声を掛けた。

「荷物それだけ!？」

「うん。こんなところに何か置いててもすぐ無くなるしね」

「そっか。それじゃあ、行こうか」

さびしそうなレカの横顔に、それ以上は聞かずに宿へと向かおうとすると、急に声を掛けられた。

「おい、レカあ。久しぶりだなあ。稼ぎはどうだ？ちゃんと、お・し・ご・と、してるかあ？」

いかにもな奴がにやにやと笑いながら、レカに話しかけて来た。

「ん？おい、そっちのいちゃんはだれだよ？客か？とうとうお前も後ろの穴売るようになったのかあ？」

あ、なんか、もすぐイライラしてきちゃったな！どうしてくれようか、このチンピラ・・・！

「（師匠、落ち着いて。私が話すから、ね？）」

小声でレカに言われたので、爆発寸でのところで黙る。

「ちょっと、昔の知り合いが尋ねてきただけだよ。こいつ、今は冒険者しててね。ほら、この通り、魔物連れているやってるみたいだよ」

僕の後ろにいる猫さんを指差してレカが言う。

チンピラは、猫さんを見ると、ぎよつとして、口早に「お、おう、そうかよ。にいちゃんも、冒険者なんか知らないけど、あんまここで大きい顔するなよな！んじゃ、俺はもう行くぜ！」と、言っ去って行った。

それを見送りながら、レカはおかしそうにしている。

「あいつ、ガリスって言って、ここらの裏を取り仕切ってるやつの息子なんだ。まあ、息子がいっぱいいて、その中の一人なんだけど。あいつ、息子の中じゃ実力なくて、あんまり大きい顔できないから、スラムでだけ、あんな態度なんだ」

「なるほどね。あんまり係わり合いになりたくないタイプだったことは分かったよ」

「そうだね。弱いものいじめしかできない奴って、ここでも陰口叩かれてるよ」

「かわいそうに。まあ、そんなやつのは置いといて、とりあえず宿に戻るつか」

「はい、師匠」

嬉しそうに返事をするレカを引き連れて宿にもどったのだった。

番外「ヒロインが・・・」

私の名前はレカ。

ハロースの南スラムに住む孤児だ。

もともとはここより少し北に位置する、色町に娼婦の母と二人で住んでいた。

母は教育熱心だった。「あんたは私みたいになるんじゃないよ」というのが母の口癖だった。

父はおらず、母にそのことを尋ねるとあまりいい顔をされなかった。

昔、酔った母が

「あなたのお父さんは、貴族さまだったのよ。あんたがお腹の中にいると伝えたら、名前考えて、絶対に向かえに来るって言って、少しのお金を置いて、それっきり。薄情な男さ。貴族なんてみんな、平民を・・・」

そのあとは永遠と愚痴が続いた。

結局、父のことを聞いたのはそれっきりだったし、それ以降聞こうという気も失せたのだった。

父はいなくても、母の愛を感じ、生活は苦しくも、雨風を凌げる家

があることはとても幸運であったことを知るのは、母がお客ともめて殺されたと知ったときのことだった。

その日、いつも帰ってくる時間に母が帰って来ず、心配になってきたときのこと。

家の前から私を呼ぶ声が聞こえて、急いでドアを開けに行くと、そこにはお隣の部屋のお姉さんが立っていた。

お姉さんも娼婦で、母と職場も一緒だった。

そんなお姉さんが急いだように、息せき切って私に告げた。

「いい！？落ち着いて聞きなさい。あんたのお母さんが死んだわ。たちの悪いお客さんからまれてね。もう娼館では、あんたのお母さんが悪いってことで話がまとまってしまっているわ、お母さんは全然悪くないのにな。」

お母さんは、娼館に借金してたから、あなたをその形に連れていくと、娼館の使いがすぐにこの家に来るわ。いまずぐ、最小限大事な物だけ持って、逃げなさい！

お母さんの死体は、スラムに捨てられると思うけど……。できるならスラムには近寄らないほうがいいわ。

こんなことしかしてあげられなくて、ごめんね。あんたのお母さんには恩がいっぱいあるのに……。

私はもう行くわ。すぐに逃げるのよ？いい？分かったわね！」

茫然自失の私に、お姉さんは念を押して帰っていった。

気づいたときには、南スラムを彷徨っていた。

そして、何時間か彷徨い、私は母を見つけた。

裸で雨に打たれ、冷たくなった母を。

その死体にすがりつき、ひたすら泣いたが、気づいたら眠っており、起きても動かない母を見て、その死を実感すると、急に不安に押しつぶされそうになった。

悲しくて、怖くて、寂しくて……。

どんどん不安になっていった。

「おい、譲ちゃん。こんなところで何してやがる」

いきなり声を掛けられ、振り向くと、人相の悪い、ぼろぼろの服を着た男がこちらを見ており、どことなく剣呑な雰囲気飲まれた私は、一目散に駆け抜けた。

ひたすら走って、走って、たどり着いたのは一軒の廃屋だった。

そこで一晩明かして、また母のところに行ったところには、母の死体

は無くなっていた。

スラムに住むようになってしばらくして知ったのだが、あそこは死体置き場で、わけありの死体があそこに放置され、お金をもらったスラムの人が処理するのだという。

人間にながっても、お腹は減って、けどお金は無く、手元にあるのは母からもらった数冊の本と着るものくらいだった。

結局、その日は母と共にきたことのある古着屋に服を売って、露店で食べ物を買って食べ、廃屋に帰って寝た。

しかし、そんな生活が長続きするわけもなく、本も売ったが、そのお金も無くなり、途方にくれていた。

そこに、当時、南スラムの子供をまとめていた子が来て、私をスラムの子供の寝床になっている一角に連れてきたのだ。

なんでも、昔お世話になったスラム出身の人に頼まれて、ずっと探してくれていたそうだ。

その昔お世話になった人とは、隣のお姉さんだった。

そして、リーダーは私に寝床をくれ、スラムで生きるための様々なことを教えてくれた。

仲間もできた。

仲間と共に、盗みもした。

生き残るために必死でゴミを漁った。

しかし、仲間はずんずん減っていった。

甘い言葉を鵜呑みにして、娼館に身売りしたり、チンピラに使い潰されたり、犯罪で捕まった者もいた。

警備隊に捕まった仲間はまだまだしなほうで、冒険者にちよつかいだして捕まったり、ハロースの裏を取り仕切っているやつらに捕まった仲間は、怪我をしたり、ひどいものは帰ってこなかった。

リーダーもそのうち娼婦になり、スラムには顔見知りがいる程度で、仲間と呼べる奴は消えてしまった。

また孤独になったが、仲間たちに教えてもらったスリの技術があったので、食うに困らないくらいの稼ぎはあった。

そのうち、私も女っぽくなってきて、何度か襲われそうになり、女ということを隠すために、口調を変え、髪もばつさり切った。寢床も定期的に変えるようにした。

そんなある日、私はいつも通り、仕事に勤しんでいたら、たまたま田舎モノっぽい男を見つけた。

どうみてもカモで、雑踏の中を右往左往しているところを『お仕事』した。

その瞬間、男の後ろに大きい獣が見えたが、すぐに雑踏に紛れ込ん

だので、いつたいなんだったのかは分からなかった。

しかし、それが運命の出会いだったのだ。

番外「ヒロインが・・・」(後書き)

ヒロインが3人目。

猫、男、幼女・・・なぜこうなった・・・

第十三話「初依頼を受けた日」

宿に入っただけで、リリムさんに部屋の空気が無いか聞いたら、呆れ顔をされてしまった。

「あんた、冒険者成り立てでしょ？そつちの子もお金もってるようには見えないし。2人とも個室で大丈夫なの？2人部屋で、魔物も部屋のほうで寝るなら、問題起こさない限り、結構安くするわよ？」

「僕はそつちでもいいけど、レカは女の子だし、安くなるなら2人部屋でいいです！」・・・本当にいいの？」

「師匠は信用してるし。安くなるならそつちのほうで絶対いいよ」

「レカがそう言うなら。2人部屋をお願いします」

と、言うわけでほとんど使わなかった一人部屋から二人部屋に移動。

一人部屋よりちょっと広いスペースにベッドが2個あり、ベッドの間にはテーブルがある。

自分の荷物を片方のベッドに置いたら、なにやらベッドでうれしそつちでうろたえているレカに話掛ける。

「まだ、そろそろお昼だし、ギルドまで行ってお昼食べてから、依頼を受けようとおもっただけど、どうかな？」

「はい」

「なんか、やらうれしそうだね、レカ」

「だって、ベットなんてすごい久しぶりなんだもん。へへー」

また、ごろごろしだすレカを引きずって部屋を出た。

ギルドに行つて、レカと猫さんと食事をとると、依頼の張つてあるボードの前にく。

階級ごとに別れている依頼と、特殊依頼をざっと見て、よさそうなものを探していると、ちょうどGランクでゴブリン討伐の依頼があった。

内容も、ハロース近くの村に棲みついたゴブリン少数の討伐というお手ごろ具合。

さっそく、カウンターにギルドカードと共に依頼書を出しに行く。

「このクエストを受けたいのですが」

「はい。ただいま確認いたしますので暫くお待ちください」

そういって、職員さんはカードと依頼書をもって奥へいって、すぐにもどってくる。

「こちら、カードをお返しします。

ゴブリン討伐の依頼を受領いたしました。

一度、村に寄っていただいて、詳しい場所などの確認をしてください。

そして、依頼が完了しましたら、確認してもらってください。

確認が終わりましたら、こちらの依頼書に村長の魔力印を押してもらって、それをギルドに提出していただければ、依頼達成となり、報酬が支払われます。

説明は以上ですが、何か質問ございますか？」

「大丈夫です」

「それでは。いってらっしゃいませ」

「はい！いってきます」

職員の人に見送られて、猫さんとレカを連れてギルドを出る。

ゴブリンが多くて10匹程度とのもので、特に用意するものも無く。

早速、西門からハロースの外へでて、依頼書の村へ向うことにする。

歩いて2時間程度の距離だったので、道中少ししか薬草について話ができなかったけど、レカは飲み込みが早く、僕なんかよりよっぽど頭がよさそうだ。

「これが、擦り傷に効く薬草。こっちはただの雑草。ちょっと見分けにくいけど、葉っぱの先が違うからね。覚えて置くように」

「本当だ、こっちのほうの葉っぱが丸いんだね！」

「当たり前。間違っても怪我人に雑草を刷りこまないように気を付けるんだよ」

「はい」

とまあ、こんな風にしてあっという間の2時間だった。

そして村が見えてきて、柵に近寄ると、若い村人に止められる。

「なんだお前らは！」

「ギルドの依頼で来ました、冒険者のキャスと申します。村長さんはいらっしやいますか？」

「おまえが？・・・ちょっと待ってる、村長を呼んで来る」

と言って、若い村人は走って村のほうへ。

すぐに、30台くらいのたくましい男の人が来る。

「私がこの村の村長の、デイルです。このたびは依頼を受けてくださりありがとうございます」

「は、はい。こちらこそ？」

やけに低姿勢の村長に、驚いて変な返しをしてしまう。

「はっはっは。いや、魔物を従えているなんて、お若いのに大したものですね」

ああ、なるほど。すっかり猫さんに違和感がなくなってたけど、そういえばサイ村でも最初は警戒されてたよなあ。通りでさっきの若い村人も変に警戒してたし、村長さんに至っては何を勘違いしたのか超下手だし。

「いや、まだまだ駆け出しの身です。この子も、力で従えているわけではありませんので」

「なるほどなるほど。しかし、そのようなお強そうな魔物を連れてくる冒険者の方が、依頼を受けてくださるなんて、心強いかぎりですよ」

聞く耳を持つてもらえない！

仕方ない、仕事の話しよう。

「それはそうと、ゴブリンが出るそうですが、具体的にどの辺りで出るのでしょうか」

「おお、さっそく退治してくださいるのですな。

ゴブリンは、村の裏手の山に縄張りを作っております、何度か村人でも山狩りをしたのですが、ゴブリンと侮っていたら、若い者が命を落としてしまいました。これ以上は被害をだしたく無く、ギルドに依頼したのです。数のほうは大体10匹くらいだと思います」

「なるほど、わかりました。早速行ってきましょう。終わったら、また戻ってきますね。確認のほうはどうしましょうか？何か切り取

って持ってきてますか？」

「それでは、ゴブリンの右耳をお願いします。

それとできれば、終わりましたら、ここに警備の者がいつでもいますので、それに私への伝言を任せてもらってよろしいですか？言いくらいことですが、そちらの魔物を怖がる村人もおりますので。もちろん私は、人に従っている魔物の有用性を分かってはいるのですが、村人の中にはそういったものばかりでもないものでして」

なるほど、だから今も門前なのか。

「分かりました、それでは行ってきます」

「はい、お願いします」

そして、村の裏手の山へ。

「むー、猫さんこんな可愛いのに、怖がるとかありえないよー！」

「にゃーん」

「さすが、僕の弟子！よくわかってるな！しかし、猫さんはやらない

いぞー！」

「師匠って猫さんのことになると、人が変わるよね」

「狂おしいほど愛してるからね！」

「にゃん！」

変なものを見る目で弟子に見られた・・・

「のろけはこのくらいにして、仕事をしようか」

「はあ。けど師匠、この山結構広いし、見つかるまで時間かったら、最悪野宿かな、村入れないし。」

「うーん、たぶん猫さんなら探せるはず！」

困ったときの猫さん頼りというわけで、猫さんにゴブリンの気配を探してもらったことに。

程なく、猫さんが一鳴きすると、着いて来いといわんばかりにお尻をふりふり歩き出したので、着いて行くことに。

そんな雄雄しい猫さんも可愛いよ！

トリップしてると、ゴブリンが集まって何かを食べているところ遭遇。

息を潜めて、確認をとる。

「猫さんはいつも通り、後ろから狙撃でおねがい。レカは今回は猫さんの後ろに」

「にゃん！」

「はい、師匠！」

「それじゃ、さくつと行こうか」

作戦会議もすんで、さっそくゴブリンの群れにお祈りして突撃。

おれ、この依頼が終わったなら、猫さんと教会行ってお祈りするんだ・
。。。

そんなことを考えてるうちに終了。

猫さんはどんどん狙撃も早くなってきて、本当に肉壁しかすることが無くなってきた。

そのうち、僕が突撃するまえに猫さんの狙撃でおわりそうで怖い。

ともあれ、依頼も済んだので、魔力石を回収し、戻ろうとすると、レカが呆然と立っている。

「どうしたの、レカ？」

「ハッ！？師匠！なんなの、あの猫さんの攻撃！猫さんみたいになつことできる魔物いっぱいいるの！？それなら、町から出たくないんだけど！それに、師匠も！全部敵引き付けたのに、攻撃全然当たつて無いし！どうなってるの！？」

「いや。猫さんみたいのは早々いから安心しなさい。町の周辺にはそこまで強いのはいないよ、いてもすぐ討伐されるし。猫さんは特殊だから、あんまり気にしないでいいよ。僕も結構鍛えてるからね。ゴブリンの棍棒くらいじゃ怪我しないから、逆に余裕もつて避けられるだけだよ。ああ、けどレカは無闇に攻撃受けちゃダメだからね、痛いと思うから。それよりも、ゴブリン一匹程度ならレカでもなんとかなりそうだったでしょ？」

「あー、はい。けど、猫さんにあまりに驚いて、そこまでちゃんと見てなかったけど」

「なるほど。まあ、十匹を一人で、つてなるときついかもしれんだけど、慣れてくれば対処できるし、頑張つていこうね」

「分かった、頑張るよ！」

「元気があつてよろしい！それじゃ、村に戻つて魔術印もらつてかえりましょ」

「はい」

つてな感じで、比較的楽に初仕事を終えたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0861z/>

猫さんといっしょ

2011年12月10日22時46分発行